

第39回 現代世界の地誌的考察

■■ 現代世界の諸地域編 ■■

世界のさまざまな地域を見てみよう

～ラテンアメリカ ②～

監修・講師

矢ヶ崎典隆

学習のねらい

ラテンアメリカは、豊かな資源と工業化の進展により、世界における存在感を増している。その社会や経済の基盤となったのは、植民地時代にイベリア半島から持ち込まれた土地制度であった。大土地所有制が農業や社会に及ぼした影響について、また、資源と工業化の特徴や大都市が直面する社会問題について、おもにブラジルに焦点を当てて考えてみよう。

今回のポイント

- 大土地所有制と農業の変化
- 鉱産資源と工業化
- 経済発展の光と影

■■■ 大土地所有制と農業の変化 ■■■

ラテンアメリカの農業の形態や社会の構造に影響を与えたのが、イベリア半島から持ち込まれた大土地所有制であった。ポルトガルの植民地となったブラジルでは、開発を促進するために、少数の人々に広大な土地が賦与された。北東部で16世紀に始まったさとうきびプランテーションは、農村地域における社会と経済の単位であり、そこでは地主を頂点とした階層社会が形成された。ブラジルの他の地域でも、大土地所有制のもとで牧場やコーヒープランテーションが経営され、多くの人々が土地を所有することはなかった。一方、20世紀後半からは多国籍アグリビジネス企業が進出し、大豆などの大規模栽培が始まると、住み込み労働者は農場から追い出され、大都市のスラムへ移動せざるを得なくなった。ラテンアメリカの貧困と不平等を理解するためには、独占的な土地所有に注目する必要がある。

■■■ 鉱産資源と工業化 ■■■

ラテンアメリカの国々はさまざまな鉱産資源に恵まれている。ブラジルの鉄鉱石、チリの銅、メキシコやペルーの銀などは世界で上位に位置するほか、石油の生産はブラジル、メキシコ、ベネズエラなどで盛んである。このような鉱産資源の開発には、アメリカ合衆国やヨーロッパの企業が積極的に関与してきた。20世紀中ごろからラテンアメリカでは工業化が進んだが、豊かな鉱産資源は工業発展の基盤となった。工業化の過程でヨーロッパ、アメリカ合衆国、日本など、外国資本が導入された。特にブラジルとメキシコはラテンアメリカを代表する工業国である。北米自由貿易協定（NAFTA）に加盟するメキシコには、自動車工場のように、輸出

